2008

大島造船 特別号

発行所　株式会社　大島造船所　〒857-2494　長崎県西海市大島町1605-1〔ホームページアドレス　http://www.osy.co.jp〕

山下泰裕氏と南代表（ドック渠底にて）

夢への挑戦

山下泰裕氏　講演録

〔付録〕奥田碩氏と共著『武士道とともに生きる』紹介

柔道をとおして日本の心を伝えたい

4月7日、大島アイランドホテルに於いて、東海大学教授の山下泰裕氏をお招きし、社内講演会が開催されました。当日は南代表・深田会長・小林副会長・中川社長をはじめ約200名が聴講しましたが、ここにその講演の内容を特集してご紹介致します。

山下泰裕氏は1984年のロサンゼルスオリンピック大会の柔道無差別級で金メダルに輝き、同年国民栄誉賞を受賞されました。現役を引退するまでに国内・国際大会通算で前人未踏の203連勝を記録するなど、その現役時代の圧倒的な強さから『史上最強の柔道家』といわれています。

引退後は後進の指導に努め、日本の柔道男子監督を8年間務められたのをはじめ、国際柔道連盟でも教育コーチング理事としてご活躍。現在は全日本柔道連盟の理事として国内外で幅広く柔道の普及・指導にあたられています。

山下泰裕氏の講演会（大島アイランドホテル）

山下泰裕氏をお招きして

南代表挨拶

平素は社員の皆様方に大変ご苦労をお掛けしております。皆様の精進のお陰で、ほぼ順調に経営を進めていられることを心から感謝し、お礼を申し上げたいと思います。

本日は、山下泰裕先生をお迎えすることができました。山下先生は、世界中を飛び回っていらっしゃって大変お忙しい。そんな中で大島造船所にお越しを頂けたことは、私どもに取りまして本当に夢のようでございます。こんなに嬉しく、有り難いことはございません。

私は山下泰裕先生を心より尊敬申し上げております。是非皆様にもその謦咳に接し、触発されて頂きたいというのが私の希みでございました。今日、お越しを戴いたことは本当に有り難いと思っております。

山下先生のお考え、そして語られるお言葉に、私はいたく感銘を受けております。柔道・スポーツを通して世界各国で世界の平和をアピールし、世界の青年子女に正しい心を持って頂けるような運動をなされておられます。

翻って考えてみますと、日本人の心、日本人の心とは何なんだろう。それは今どうなっているのだろう。中でも、日本人が古来から大事にしてきた『勤勉であること』『正直であること』『互いに思いやる和の心』『物を大切にする心』、なかんずく、われわれが古くから大事にしてきた民族の大切なこと、それは『恥を知る』ことであります。『他人に迷惑を掛けないこと』であります。それが文化であった。ただ残念なことに、今の日本人にはそれらの心が眠っているやに思われます。

山下先生は、柔道・スポーツを通して勝ち負けを超越して、そこに日本人のあるべき心、あるべき姿、そして世界があるべき姿、青少年が持つべき心を何とか覚醒させるべきだ、というその先頭に立っておられます、日本の先進性をそこに感じて、世界にその先進性を広めていこう。私はその点に非常に感銘を受けております。

どうか皆さん、本日は心を澄まして聞いてもらいたい。そして皆さん方ひとり一人が、皆さんの人生に、皆さんの仕事に活かして日本の社会に貢献できるようになりたい。私はそんな思いで、本日はお忙しい中を山下先生に大島にお越し戴きました。これからご静聴をお願い致します。

歓迎の意をこめて、今一度拍手をお願いいたします。

夢への挑戦

山下泰裕氏　ご講演

人生を前向きに生きる

お早うございます。

ご紹介頂きました柔道の山下でございます。今、南代表様から大変素晴らしい身に余るお褒めの言葉を頂きましたけれども、そんな立派な人間ではございません。ただ人生を前向きに生きたい、少しでも人間として成長して行きたい、そして多くの人に支えられて今の自分がある。たくさんの人に支えられてきたのであれば少しでも恩を次の世代の人に返したい、そういう思いで生きているだけでございます。

身体は大きいです。しかし、この身体以上に、周りの人の見る目は実物以上に能力以上にものすごく立派な人間だ、ものすごくなんでもできると、相当高い評価を頂いています。しかし、大きくても穴ボコだらけ、でも前向きに生きて行きたい。そんな気持ちでおります。

大島造船所との出会い

今回大島造船所にこうやってお招き頂きまして、皆様の前で、私のこれまでの人生、これからの人生について話ができるということを、私自身も大変光栄に思っております。

実は、友人であるNHKの元論説委員小林和男さんから、長崎に大島造船所という素晴らしい企業・会社がある。非常に高収益ですごい進歩を遂げている。そこの代表の南さんも素晴らしい人だ、よかったら是非一度行って話しをして欲しい、こういう依頼がありました。

話を聞いて、私の中では私なりのイメージを持って昨日今林様（専務）とお会いしたんですけど、この大島造船所に来る途中、この造船所のこれまでの歴史をお聞きしました。創業時から大変な苦しみの中で、オイルショックなどいろんな影響があった。その中で苦しんで苦しんで、苦しみ抜いて、そして平成に変わってから会社の体質も変わり、そして今は素晴らしい成長を遂げられている。その話を聞きまして少し感動しました。

実は昨日、私の教え子の井上康生が福岡の体重別で優勝しました。彼はシドニーオリンピックで優勝して、絶頂期に足をケガしてアテネオリンピックで敗れ、そのあと右肩大胸筋を断裂するなど、苦しんで苦しんできました。しかし、昨日は素晴らしい試合を見せてくれました。

私なんかは常に恵まれて、常に日が当たって、多くの人に支えられて来ましたけれども、やはり本物というのは厳しい環境の中で生きてきて初めて生まれるのだな、と思いました。大島造船所のトマトも、そういう厳しい環境の中で信じられないようなトマトができあがっています。やはり人も組織も、そういうもんだなあということを、話をお聞きしながら感じてきました。

三つの挑戦

先ほど一時間ほど、造船所の中をいろいろ見学をさせて頂きました。勉強させて頂きました。柔道しか知らない人間です。そして東海大学を出て、そのまま大学に残った教員です。しかし、自分の教え子は実社会に送り出していかねばなりません。

柔道しか知らない、大学しか知らない、そんな自分が教え子を本当に社会に出していけるのか、彼らが活躍していけるのか、いろんな機会に少しでも視野を広げたいと思っていますが、今日は小一時間、むしろ短い時間ですけれども、いろんな勉強をさせて頂いて、私の見える物もまた少し変わってくるのかなあ、そう思っています。

非常に近代化された中で、6万トン級の船を造るのに一隻あたり8日という、信じられないような工程の中でそれを造られている。つい15年20年前までは、造り方も全然違っていたと聞きました。やはりですね、一人一人の意識が、組織が、変わっていくと短い期間に業績も変わるけれども、体質も変わっていくんだなあと、そんなことを勉強させて頂きました。

私は、色紙に一言と頼まれますと、書く言葉は「挑戦」

です。

私が好きなのが三つの挑戦です。夢への挑戦、可能性への挑戦、限界への挑戦。これは、これまでだけでなくこれからも私自身が大事にしていきたい、自分自身の人生に対する姿勢を表した言葉だと思っています。ですから今日は「夢への挑戦」という題にさせて頂きました。

幼い頃の思い出

私は隣の熊本の生まれなんですけれども、柔道を始めたのは小学校四年生です。私の場合、話をする時は必ずここから話をしなきゃいけないんです。何でかというと、これが今までの私と、或いはこれからの私とものすごくつながっているんですね。

九州の真ん中、熊本県上益城郡矢部町に私は生まれました。小さい頃から人一倍身体が大きかった。身体が大きいだけでなく、元気があった。有りすぎた。有りすぎた元気が、エネルギーが悪い方へ悪い方へといって、幼稚園時代、小学校時代、大変な問題児でした。私がいるから怖くて学校に行けないと、登校拒否を起こすクラスメイトまで出る、そんな小学校時代でした。

柔道を始めたころ

私の家は食料品店を経営していましたが、親父もおふくろも非常に仕事が忙しい。子供の私生活まで手が回らない、このままいったら間違いなくうちの息子は将来他人様から後ろ指をさされる人間になってしまう。なんとかせにゃいかんと、そこで考えついたのが私に柔道をやらせることだったんです。

柔道を教えている先生の指導は非常に厳しい。柔道でもやらせたら少しは人に迷惑を掛けなくなるのではないか、と周りからのアドバイスを受けて、おふくろが私を道場に連れて行きます。

「先生、柔道でビシビシ鍛えて、私の息子の根性をたたき直してください」

こうお願いして柔道を始めたのですけれど、始めてみたら柔道が大好きになりました。

教室で暴れると周りに迷惑掛けますが、柔道着を着て、帯を締めて、ルールと先生の指示を守ればいくら暴れ回っても道場では誰からも文句は言われない。柔道は私のあり余るこの闘争心、エネルギーを発散させる場として最適でした。しかし、遊びの延長として柔道をやっていましたので、柔道をやったからといって私の行いは良い方には変わらなかったんです。

同級生からの表彰状

今から24年前、ロサンゼルスオリンピックで私は優勝しました。優勝して熊本の郷里に帰りました。小学校の同級生がみんな集まってくれお祝いの会を開いてくれました。最後に私は一枚の記念品を頂きました。その記念品というのは一枚の表彰状です。こう書かれていました。

表彰状

山下泰裕殿

あなたは小学生時代その比類まれなる身体をもてあまし、教室で暴れたり仲間をいじめたりして、われわれ同級生に多大な迷惑をかけました(笑)しかし今回のオリンピックに於いては、われわれ同級生の期待を裏切るまいと不慮のケガにもかかわらず、持ち前の闘魂を発揮して見事金メダルに輝かれました。このことはあなたの小学生時代の数々の悪行を清算して余り有るだけでなく、我々同級生の心からの誇りとするものであります。よってここに表彰し、〝やっちゃん〟に対して最大の敬意をはらうと共に、永遠の友情を約束するものである。

こんな表彰状を頂きました。何が言いたいか。いかに小学校時代に私が周りに迷惑をかけていたか、この一枚の表彰状で、そのすべてを物語っているんではないかなあ、そう思っています。

過去のことは振り返らない

私は今50歳です。あと二ヶ月で51歳になりますが、どうも普通の人よりちょっと変わっているみたいです。

その一つが、あまり過去を振り返るのが好きじゃない。何が好きか、今をひたむきに生きていくこと。もう一つは、これから未来・将来を見据えて生きていくこと。このことが非常に大事な、大好きな人間です。

振り返ってみましたら、選手時代もそんな感じでした。よく新聞、雑誌、テレビ等の

インタビューで、「山下さん、なんであなたは203連勝、こんなに勝ち続けることができたんですか？」と何度も質問が来ました。

何回も答えている内にハッと気がついたのは、自分はこれまでどれだけ登ってきたかということよりも、自分が目指しているものは何処なのか。それに対して、今の自分は何処にいるのか、登ってきたことではなく、これから登るということを大事にしてきたから、あそこまで頑張ることが出来たのではないか。

ですから、周りがどんなに凄いと言っても、「こんなもんじゃいかん」と自分が目指しているものからするとまだ低い。そんな思いできたことが、自分にとっては非常に良かったのかな。そして今も終生も、この生き方は変わらないだろうと思います。

その一つが、これまでさまざまなところで表彰されたりしてきましたけど、過去の栄光の品々を飾るということに対して何か変な抵抗があり、そういうものは一切飾っていないんです。

過去は関係ない、今とこれからだ。そういう中でもたった一枚だけ私が飾っているのが、この小学校時代の同級生から頂いた表彰状です。

現在五十歳、もう人生の曲がり角とか、マラソンでいうと折り返し点はとっくに過ぎています。でも自分の中では、飛行機に例えると俺の人生はホンマこれからだ、これから飛び立って行くんだ。これまでの50年間は人生の助走、滑走みたいなもんだ。こんな気持ちで生きている人間でございます。

奥田　碩さんと柔道の縁で

トヨタ自動車㈱の前会長奥田碩様には、一橋大学で柔道をやられていたこともあり色々と可愛がって応援して頂きました。

奥田様が会うたびに何度もおっしゃったのが、

「山下君、トヨタは今が一番あぶないんだよ。謙虚に、愚直に一生懸命物づくりをやってきて、みんな凄い凄いと言っているけど、このトヨタの社員が、俺らは凄いんだと、そうちょっとでも驕りや慢心が出てきたら、もうこれまでみたいな発展はないだろう。周りが褒め称える時が一番こわい。いかに今までと同じように謙虚な気持ちで愚直にやっていけるかが鍵なんだ。本当に僕は危機感をもっているんだよ」

一度二度ではありません、何度もこの話をされました。

なんの世界でも、本当のトップ、本物を目指していくのは同じなのかな、そういうふうにも感じております。

中学校の恩師

そんな暴れん坊だった私が中学校に進んで、素晴らしい武道の恩師と出会って、そこから変わっていくんです。

私が進んだ中学校は熊本市の真ん中にある熊本市立藤園中学校です。ここの柔道部で、白石先生という師と出会います。私が進んだ中学校はとてつもなく柔道が強かったんです。私が入った頃は9年間公式戦無敗でした。

私が中学一年の時に第一回の全国大会があったんですが、一回、二回、三回と三連覇しているんです。しかし、日本一強い柔道部で、この柔道部の監督の白石先生がわれわれに教えられたのは、試合で勝つための技術、体力、戦術だけではなかったんです。柔道をやる人間としてのあり方、生き方、心構え、柔道の道、教育的価値、こういう話を繰り返し話されました。

私は非常に横柄で生意気な人間でした。柔道だけは強く、好きだった。柔道だけは強くなりたかった。この先生の話を素直に聞いていけば必ず強くなると思った。そして先生が言われる言葉は、試合での勝ち負けだけじゃない、人間としてのあり方、その教えが頭のてっぺんから身体にしみわたるように入って、そこから私は変わっていったんです。

先生が我々に一番言われたことは、単に柔道のチャンピオンになるだけでなく、人生の勝利者を目指せ。柔道でやったことは必ず人生に活きる。活かさなければいけない。どんなにチャンピオンになったって、柔道着を脱いだ人生の方が長い、柔道のチャンピオンには一人しかなれないかも知れないけれど、みんなが柔道の精神を、日常生活や人生に活かすならば、みんながチャンピオンになれる。大事なことは人生のチャンピオンを目指すことなんだ。

それから、やはり一流になりたかったら、強くなりたかったら、常に人の話を素直に聞ける心を持ちなさい。大きな夢を持ちなさい。そのように、中学時代に恩師からいろんな教えを受け、そこから私の人生が変わっていったような気がします。

松前重義東海大学総長

高校二年の時に熊本から神奈川に転校しました。神奈川県の東海大相模高校という所です。稽古は東海大学ですることになりました。

東海大学を創設したのは松前重義という博士ですけど、同じ熊本の出身でした。そして柔道をこよなく愛していました。ご自身は東北帝大に行かれて技術者になられた。大学に入った時点で大好きな柔道とは縁が切れたんですね。思いっきりできなかっただけに柔道に対する思いは強くて、国際柔道連盟の会長も8年間務められ、世界の柔道の普及にも大変ご尽力されました。その東海大学の創設者と縁があって、私は神奈川へ行きました。

創設者は、私を孫のように可愛がってくれました。そして、生前何度か私に言われたことが、

「山下君、僕はなんで君をこ

んなに一生懸命応援するか分かるか。試合で勝って欲しい、それもあるよ、しかし、それだけじゃない。日本で生まれ育った柔道を通して、世界の若人と友好親善を広げていって欲しいんだ。もっと言うと、僕が君を応援するのは、スポーツを通して世界平和に貢献出来る人間になって欲しい。そんな思いで君を応援しているんだよ。わかってくれるか」

何度かそういう話も頂きました。

現実には、総長が生きてる間には頭では分かっていても身体では解っていなかった。亡くなられてから、だんだん身体に入ってきてそんな活動を展開しているんですけれど、そういう創設者の理解のもとに、私は東海大学で柔道の英才教育を受けます。

東海大学で英才教育

東海大学では佐藤信幸という、もう一人の素晴らしい柔道の恩師と出会います。私だけ監督の家に寝泊まりして、寝食を共にしながら世界を目指しました。

佐藤先生から私が学んだこと、教えられた事もたくさんございます。でも今振り返って考えてみますと、私が佐藤先生から受けた影響は何だろうかと考えてみますと、それは試合で勝つための技術とか戦術とかそういったものより、もっと言えば先生から受けた教えよりも、先生の生き様から、後ろ姿から学んだことの方が私にとっては非常に大きな影響を及ぼしてるんじゃないか。そう思っています。

同じ家の中に住みますと、道場での先生だけじゃない、授業での先生だけじゃない。ありのままの先生の姿が私には見えるんですね。先生の人生に対する姿勢。家族にたいする姿勢。そういったものも見えました。一人の人間としていかに生きていくか、その先生の姿勢から、学んだことが、まだ十分では無いけれども、自分の生き方の軸になっているのは間違いないと思います。

私も教育者のはしくれです。もう28年くらい教育に携わっています。まだまだ勉強すべきことは山ほどあります。知識も大事、伝え方話し方も大事、しかし、やはり一番大事なのはその人の人生に対する姿勢なんじゃないかなと、そう思っています。まだまだ未熟だけど、自分の生き様で、自分の後ろ姿で、何かを若者に、学生に伝えていく。そういう人間を目指していきたい。そう思っています。

指導者としての試行錯誤

東海大学を出て、東海大学の大学院に進みました。大学院を修了して東海大学の教員になりました。教員になっても最初は現役の選手ですから、学生を教えることより、自分自身を磨くことが中心でした。選手をやめてから、本格的に学生の指導に取り組んできました。正直言いまして学生の指導に自信がありました。自分自身が誰にもできないだけの実績を持っていましたし、誰よりも多くの汗をかいて、誰よりも〝どうしたら勝てるか〟真剣に、これに精力を傾けてやってきたという、そういう自負があったんです。

しかし、自分を磨くのと人の持っているものをはぐくみ育てるのとは、これは全然違います。まして多くの人に支えられて、一番いい環境でやってきた私が、挫折を知らない私が、自分の思いだけで相手の立場を考えないで言ったって、うまくいく筈はありません。

最初の頃は、かなり指導でも失敗しました。学生に迷惑を掛けました。試行錯誤の連続でした。そして学生からいろんなことを教わりながら、学びながら、失敗を重ねながら、人を導く、人を育むということがどういうことなのか、何が大事なのか、少しずつ分かってきたような気がします。

特に初期の学生には、熱意はあったけれども一方的な思いこみで非常に迷惑をかけたんじゃないかと思っています。

今日は一つ、学生から気づかされ、今の私の生き方に非常に大きな影響を与えた学生からの教えについて話しをしたいと思います。

今から17年前の話です。私が監督になって二、三年目でした。柔道部の四年生に一人、私からみたら問題児がおりました。何が問題か、頑張ろうという意欲があまりない、そして楽な方へ楽な方へ、仲間や後輩を引っ張ってると、私にはそういうふうに見える学生がおりました。

正直言って非常に迷惑でした。口に出しては言いません

けれども、
「お前なんかいらねぇよ。そんなにやる気なかったら、うちの柔道部にいる必要はないじゃないか、やめて欲しいもんだ！」
　私はこんな思いをもっていました。口に出して言わなくても、心で思っていれば相手に伝わります。いつもこの学生は私を避けるようにしていました。

難病の子供に出会って

　ある時一本の電話が、私のところに掛かってきました。白血病のお子さんを持つ岡山県の方からの電話でした。神奈川県の伊勢原市に東海大学の大学病院がございます。こちらは白血病あるいは血液難病の治療で非常に成果をあげている病院なので、ここで診てもらえるって、岡山県からご両親とお子さんと三人で治療を受けに来られたんですね。
　担当のドクターと会って話しを伺い、そこで分かったことは、この治療を進めるためには多くの血液が必要です。まず血液の確保をして下さいと、そう言われて親子三人で伊勢原市内の高校や市役所を、なんとか自分の息子のために献血をお願いしたいと頭を下げて回ったのですが、どこからも良い返事が来なかったそうです。三人でがっくりして、肩を落としている時に、ふと私のことが頭をよぎったそうです。あっそうだ、東海大学といえば柔道の山下さんがいるじゃないか。山下さんのところにいっぱい学生さんがいる筈、ワラにもすがるような思いで私に電話をかけてきたのです。
　早速、私は担当のドクターと話しをしました。そこで分かったことは、その子の血液型はA型、緊急な場合、24時間以内に最低一人、できれば二人、駆けつける体制をとって欲しいと言われました。早速柔道部の学生をみんな集めて、こういう人がいる、協力してくれないかと、そういう話しをしました。
　やりましょうと、A型20名くらいが集まってローテーションを組んで、順番に協力する体制を取ったんです。その中に、「お前なんかいらねぇ」と私が思っている柔道部の四年生の子も含まれていました。
　治療には、最終的におとうさんの骨髄が合いました。そのお子さんは元気に退院して行かれました。

思いがけないエピソード

　退院する前にお母さんが私の所に来られて、涙を流しながらお礼を言われたんです。そこで私が知ったのは、問題だと思っていたその学生が、何度も何度も見舞いに行っている。東海大学のメインキャンパスから大学病院までは電車とバスを乗り継いで一時間くらい掛かるんです。しかも教育実習とか、定期試験で行けない時には、その四年生が励ましの手紙も書いている。私はお母さんからその事を聞かされた訳です。
　もちろんこれは嬉しい事でした。その日の練習の開始の時に、礼をしたあとみんなを集め、みんなの協力のお陰で誰々君が無事退院できた、良かったなぁ、本当にありがとう、特に四年生の誰々は、こんな、こんなに素晴らしいことをした。前に出てこいよ、みんな拍手しよう。
　私はその時、その四年生の手を両手で握りしめて、お前がやったことは素晴らしいことだよ、この気持ちをこれからも大事にしていけよ、こう

いうふうに話しをしたんです。
その後振り返ってみますと、この四年生にとって、もしかしたら認めて欲しい柔道部の監督から初めて認められた、誉められた瞬間じゃなかったかなと思うんですね。

学生たちの苦悩

彼は兵庫県の出身でした。高校時代、県の中量級のチャンピオンでした。県内大会ではエースとしていつも大活躍をしていた。日本一柔道が強い東海大学にきて、レギュラーとして活躍したい、そういう気持ちで学校にやって来たのは間違いない。非常に難しいけれど、出来れば胸に日の丸を付けて国際舞台で活躍したいと、思ってきたかも知れません。

しかし、入ってみたら思ったよりはるかにレベルが高かった。でも一年生の時って頑張れるんですね、みんな自分らが一番下だと思っていますから。二年に上がります。下から優秀な新入生がきて抜かれるんです。三年に上がる。二年間一生懸命稽古してね、また抜かれる。先が見えてきます。

高校時代は毎週のように試合があった。いつもエースとして活躍した。しかし、今はどんなに頑張ったって、頑張ったことを発表する試合は俺には回って来ないんじゃないか、そう感じる。その時にやっぱりやる気が失せるんです。ある意味で、これは当たり前のことかも知れません。

でも、私は下積みをしたことないんです。いつも周りに支えられて、いつも一番光が当たるところ、いつも一番いいところだけ取っていた人間です。だから、そういう学生の心を理解することができなかった。理解しようともしなかった。

ですから、元気がない、目標を見失って悩んでいるそういう学生を見つけたら、「ちょっとこいよ」と、頭でもなでながら、肩でもたたきながら、「どうした、最近なんか元気ないが、なんかあったんか、ちょっと飯でも食いに行こう」とか、「今度俺の研究室に来いよ」とか、言えたらまだよかったんですがね。

私が忙しくて時間がないというなら、四年生やOBに「ちょっとあいつ気持ちが衰えているな」「なんか悩みがあるかも知れない、飯でも食ってちょっと話しを聞いてくれよ」とでも頼むべきだったんです。

当時の私はそんなレベルではありませんでした。

足りなかった思いやり

私が言ったことは正反対です。傷ついてる子供の心にですね、塩やカラシをすり込むようなことをしていました。

「おい、こら。お前やる気あんのか！　なかったら来る必要ない！　出て行け！」

私はそういう言葉しか掛けられなかったんです。あとから、何であの時あんな言葉しか出なかったのか、なんでそういう学生の立場になれなかったのか、自分なりにやはり色々考えました。

学生を強くしたい、その思いは間違いなくありました。それは強いものでした。でもよくよく自分自身を問うていったら、見えてきたのは自分の醜い姿だったような気がします。それは私が日本一の監督と思われたかった。名監督になりたかった。だから、その思いが強くて、そういう学生のことを許せなかったんではないか。そう思います。

たった一回誉められただけで

私も一回だけですね、先ほどのお子さんのお見舞いに行きました。私が行った時は最悪の状態でした。そのお子さんは10歳でしたけれども、集中治療室に入って、頭の髪の毛はありませんでした。お子さんと話しをすることはできませんでしたが、お母さんにお見舞いを申し述べ、私は大学病院を失礼しました。

大学病院を出る時、ああ、このお子さんがまた元気で笑顔で学校に行ける日がくれば良いけど、難しいのではないかな、そう思いました。

もしかしたら、と思いました。この四年生は柔道部において自分の置かれている状況と白血病と闘っているお子さんをダブらせてみた部分があるのかも知れない。だから、負けるなよ、頑張れよ、と何回も見舞いに行ったのかな、そんな気がいたします。

たった一回認められて誉められて、そこからその学生の柔道に打ち込む姿勢が変わって行くんですね。もちろんこの出来事を通して、私自身の彼に対する見方が変わっていました。私の掛ける言葉にも、それから卒業するまで、彼を叱る言葉はありませんでした。この出来事をきっかけに私と彼の関係は変わり、一番変わったのは彼に対する私の見方です。彼は胸を張って大学を卒業して行きました。

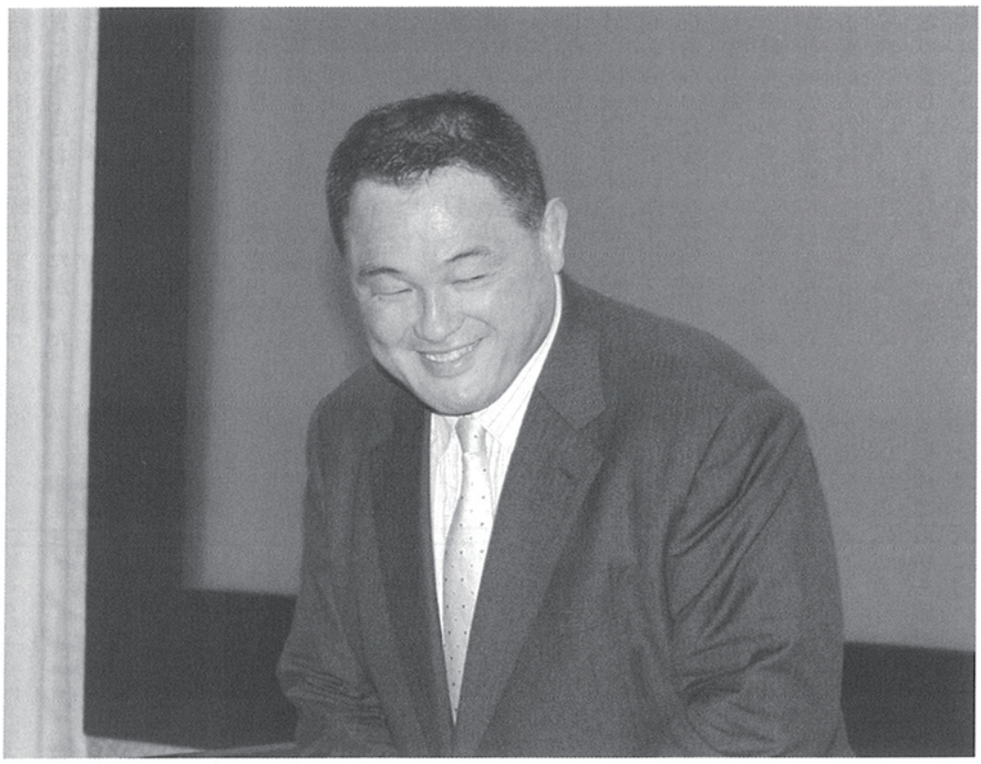
彼が私に教えてくれたこと、それは少なくとも教育に携わる人間は、人を評価する時、一面だけから見て決めつけてはいけない。できるだけ全体的に、できるだけ多面的に、相手を見ていかなければいけない。このことを、彼は私に気づかせてくれました。

これは教育に携わる人間にとって非常に大きな、大切な気付きであったと思います。人を認めること、誉めることの大切さ、そんなの分かっていますと、いろんな本を読んで勉強していました。でも、分かっていたのは頭の中だけでした。全然自分の身体では、自分の行動には反映されていなかったと思います。

輝きを引き出す

私は今思います。われわれ人間には誰にだって必ず素晴らしいところがある。誰にだって未熟なところが、不得手なところがある。そしてその人のもっている良いところ

に光が当たると、その子らしく活き活きと人は輝き始める。教育っていうのは、英語でエディケーションと言います。このもともとの意味というのは教えるという意味ではなくて、何かを引き出すという意味だと聞いたことがあります。



私は教育というのはその人の持っている良いところを引き出す可能性を引き出す、それがもともとの大切な意味なのかなと思っています。

永くやっていると、人の足りないところはよく見えます。昨日ヤワラちゃんが決勝で負けても代表になりましたけど、ヤワラちゃん、野村、井上など、自分ができるか出来ないかは別として、評論家として人の足りないところを指摘するのは簡単です。それは自分が永くやっているから出来る話なんです。私は指導する眼力として大切なのは、その人の持っている良いところを見抜く、それが一番大事ではないかと思います。

批評はすぐできるけど、彼が持っている良さは何だろうか、これは私のレベルでは、じっくりと見ていかないとなかなか見えない。一流になるためには厳しい環境でもまれて行かなきゃならない、しかし、基本はやはりその人の持っているその人らしさや良さ、それを引き出し光を当てていく。それが教育にとって非常に大事であり、その視点が今の教育にはかなり欠けているんではないかなと私は思っています。

とんでもないことに気づく

今から三、四年前。東京である講演会に行きましたところ、先ほど話した教え子が来ておりまして、私の控室に来まして、元気いっぱいでした。講演をする前に二人で非常に盛り上がりましたが、彼が出て行ったあと私はふと考えました。

「今日どうしようかな、あの話しをしようかな、止めようかな？ 当事者だから、ちょっと話しにくいな」

そう思ったんですけど、やっぱり話すことにしました。

五百人くらいの人がいらしたんですが、話しながら彼が何処にいるのか探したんですが、90分間の講演の時間中、彼の姿を見つけることは出来ませんでした。

終わって出口に向かって歩いていると、彼が通路側の席の一番後ろで身を小さくして聞いていたのが分かりました。だから、私は彼の姿を見つけることができなかったんです。小さくなっていた彼の姿が見えた瞬間、思わず手が出ました。そして、ぐっとお互いに力強い握手をした時に何かもう一つ分かり合えたかな、とそんな気がしました。

六、七年前、講演会でこの話しをした時に私はハッと、とんでもないことに気が付きました。それは何か、私もA型なんです。自分は学生にこういう困っている子がいる。協力しようじゃないかと言いながら、なんであの時に自分は同じA型だったのに協力しなかったのか。

俺は先生だ、俺は忙しいという人間としての驕りがあったんじゃないか。なんてお粗末な人間なんだ、と講演で話しをしている時にハッと思ったんです。講演が終わってから、もう一つ情けないことに気づきました。なんでこの事に気づくのに10年以上もかかるんだ。その出来事から私が気づくまで10年以上かかっている訳ですね。

でも、私は最初に話しましたね、過去は振り返らない。気づくのに遅すぎることはない、改めるのに遅すぎることはない。二度と同じような真似はしない。協力するのであれば自分を別格になど二度としない。そのことを自分の心に誓いました。

嬉しい便り

一昨年の暮れに大変嬉しい手紙を頂きました。なんとあの時のお子さんが結婚されたんです。本人からのものをお母さんから頂きました。こんな内容でした。

先生、この秋に結婚します。

結婚が決まった時にまず真っ先に先生にお伝えしたかった。でも、先生がどれくらい忙しいのか、私たちも分かっています。招待状を出せば先生にご迷惑をお掛けするんではないかと思って招待状を出すことを控えました。でも東海大学柔道部の皆さんから助けてもらった感謝の気持ちを忘れたことはありません。これから二人で今まで以上に力強く、歩いて行きたいと思います。

こんなことが書かれていました。私が見舞いに行ったのは一回きりです。その前に一回お会いしていますが、お礼をもらった時には胸が熱くなりました。

ほんのわずかな事でも、何か他の人のために自分にできる事があれば、これからもしてあげたい、そういう思いになりました、まだまだ一人前ではございません。足りないところはいっぱいあります。これからも教育を通して学生と共に学んでいきたい成長していきたいと、そう思っています。

オリンピック そして指導者へ

〝幻のオリンピック選手〟

話しは変わりますけれども、私の人生でやっぱり一番華やかだったのは24年前のロスのオリンピックです。今年は北京オリンピック。オリンピックイヤーですが、ちょっと自分のオリンピックの時の話しをしたいと思います。

実は三回オリンピックに出れそうなチャンスが私にはありました。一回目は1976年カナダのモントリオールオリンピックです。わずかな差で補欠で終わりました。その翌年から私がずうっと日本でも世界でも勝ち続けるんです。マスコミ流に言いますと、山下時代の到来。一年遅かった。

二度目のチャンスは1980年のモスクワオリンピック。しかし、これは我々にとって幻で終わりました。代表にはなったんですけれど、日本はモスクワ大会をボイコットしました。代表に選ばれながらオリンピックに出られない選手のことを、マスコミの方々から〝幻のオリンピック選手〟と言われました。柔道には私を含めて7人、幻のオリンピック選手がおりました。全員オリンピック初出場でした。そして私以外の6人は、4年後のロサンゼルスオリンピックを目指していく過程において現役を引退されました。

オリンピックは4年に一回です。見る人にとって4年に一回ですが、本当に勝負を賭けている選手にとっては、本当のピークの時に迎えるオリンピックは一生に一回あるかないかです。

幸いにも1984年ロサンゼルスオリンピックで再び代表になりました。そして念願であった小さい頃夢であったオリンピックに私は出場しました。できることは全てやった。やるべきことは全てやってきた。やり残しなく臨んだ大会の筈でしたけれども、残念ながら二回戦で軸足のふくらはぎをケガして、足を引きずりながら闘うという非常に苦しい試合になりました。

相性の良い相手に苦戦

準決勝でフランスの選手と当たったんですが、実はこの選手とは三回試合して全部一本で勝っていました。柔道って組み合いますよね、対人競技なんです。組み合う競技、対人競技というのは、やり易い、やりにくい相性というのがあるんです。私にとってこのフランスの選手とは相性が良く、ものすごくやり易い選手だった。

でも準決勝はそれまでとは全然展開が変わるんです。相手の選手が、開始早々思い切ってワザを掛けてきた。思い切ってワザを掛けてきたのが分かるというのは、分かった瞬間にはもう身体は反応している筈なんです。あのレベルより上になりますと、頭で分かったのと身体が反応するのにほとんど時間的な差はない。多くの場合は、頭で分か

らなくても無意識に身体が動いて反応するんです。

この時は頭では分かったけれど、足をかばったものですから身体が反応しなくて、棒立ちで私は相手のワザを受けてしまって投げられたんです。投げられて「効果」というポイントを取られます。私はこれまで国際大会で一回も負けたことがなかった。そして外国の選手から投げられたことも一回もなかった。

山下が足をケガして、投げられた。負けるんではないか、場内が騒然となりました。もともとちょっと頭がボーっとしているんですけれども(笑)、投げられたあと頭がボーっとしました。他人事のようにボーっとした中で、まわりがぼやっと騒然としている中で、〝ああ、俺はここで負けてしまうのかな〟そんな気持ちになりました。その瞬間にですね、非常に厳しい激しい声が私の内側から聞こえてきたんです。

「なんだお前は。お前が今まで一生懸命頑張って、頑張ります、頑張りますと言った頑張りはその程度のものなのか！　お前はこのオリンピックで足をケガして、こんなぶざまな試合をするためにきたのか！」

という声が私の内側から聞こえてきたんですね。

この声を聞いた瞬間に私の弱気が吹っ飛びました。投げられてボーっとして、ああだめか、と立ち上がって向かっていく時には思わず心の中で叫んでいたんです。

「いや違うんだ。俺がこれまで一生懸命頑張ってきたのは、オリンピックにきて足をケガして、こんなぶざまな試合をする為じゃない。こんなケガ、この程度の相手に負けてたまるか！」

と、心の中で叫びながら相手に向かっていきました。

ラシュワンとの決勝戦

勝負というのは面白いです。特に対人競技で二人でやるときは、攻める時もあれば守る時もある。私が足をケガしていることもあり、自信満々で攻めていた相手がポイントを取ってそのポイントを守ろうとした。守りに入ると、私の気迫に押されて気持ちも守れない。

勝負というのは、攻め一辺倒ではだめです。攻める時もあれは凌ぐときもある。でも私の基本的な考え方は、攻める時より守る時の方が強い気持ちが大事である。戦い方としては守りであっても、気持ちは決して守ってはだめなんです。守りの戦いをする時ほど攻めるとき以上の強い気持ちが必要です。戦術的に守っている時も、グッと相手を見据えて

「何を！　一歩も引くもんか！　どこからでもこい！」

そういう気持ちがないと、流れを変えてしまう。気持ちも柔道も相手が守りに入ってくれたため、その試合を逆転で私は勝つことができました。

決勝はエジプトのラシュワン選手。さっき映っていましたけれどね、私よりひとまわり大きいです。やる気満々でした。試合開始早々思い切って私に向かって来ました。相手が思い切って出てきて、スッと身体をさばいて空振りしました。空振りしてその勢いで倒れた。その相手に乗っかって押さえ込んで勝ったんです。(笑)10回やって一回あるかないかの幸運、でもあそこであの幸運が無かったら、今ここに来るご縁もなかったのかなと思います(笑)。

メインポールの日の丸

実は中学時代に、将来の夢という作文を書かされたなかで、私はこんな事を書いていました。

ぼくは柔道が大好きだ。一生懸命柔道の稽古に励んで、柔道の強い高校、強い大学に行きたい。そして僕の夢は柔道選手としてオリンピックに出場することだ。オリンピックに出場してメインポールに日の丸を仰ぎながら『君が代』を聞けたら最高だろうな。また、現役を終わったあとは、柔道の素晴らしさを世界の人々に広げられるようなそんな仕事がしたい。

私はそういう「将来の夢」という作文を中学時代に書いています。ふだん過去は全部忘れてもいいと言っていますけれど、夢が現実になった瞬間、多分一生この瞬間だけは、一番高いところにあがった日の丸を仰ぎ見たあの瞬間だけは忘れないんじゃないかな、私は心の中で、〝ああ、俺は世界で一番幸せな男なんじゃないかな〟そう思いました。

もちろん、私も一生懸命に頑張った。素晴らしい恩師にも出会えた。しかし、それだけで勝てるものではない。たくさんの稽古仲間に恵まれました。目標は違っても一緒に頑張る仲間が常に回りにたくさんいた。そして、多くの人が私の夢の実現のために私を支えてくれた。そういった力が一つになって夢が現実になったと思います。

誰よりも多くの人に支えられて生きてきました。少しでも多く、世界を支えられる人間になっていかなければ、頂いた恩はどうしても返していかなければいけないと思っています。

子供たちに夢を語ろう

今の子供たち、若い人、夢を持てない人が多いですね。自分のことしか見えない人、目先しか見えない人、でも夢を持つということはもの凄い力があるんですね。夢を持つこと、持ち続けること。その実現を願うこと。どうも夢をもってその実現をすごく願っていると、頑張ろうという気持ちを持たなくとも、自然と身体が頑張っていきます。

自然と夢の方向に向いて誰も言わなくても、誰もしてくれなくても、自ら歩いて行く。

目の前に困難があっても、その困難をよじ登ったり、避けたり、そういう力が本来人間にはあるみたいです。でも今はなかなか子供たちが夢を持たない。

私は今の子供たちの姿は大人の姿が映ったものであると思います。われわれ大人がもっと自信を持つことです。色々辛いことがあって子供たちの前で人生に疲れた姿や愚痴ばかり言っていては、子供たちが自分の人生に夢や期待をもてる筈がないと思います。

大人が、われわれが元気を出して、きついことも辛いこともあるけれど前を向いて、そして少なくとも子どもたちの前では頑張ること生きることの大切さ、或いは人生の素晴らしさ、自分の夢を語っていく。そのことが大事なのではないかな。子供たちが夢を持って瞳が輝いていく、そんな日本になって欲しいな。そう思っています。

柔道で日本の心を伝えたい

今、将来の夢の話しをしましたが、あのロスのオリンピックで私の夢は終わっていないんです。今の私の仕事の一つは、世界で199の国や地域が加盟している世界の柔道連盟、発展途上の貧しい国々の柔道支援をしながら、日本の心を伝えていく。NPO法人を立ち上げる。そういう活動をしております。

あの中学時代の作文に書いた「現役を引退したら、柔道の素晴らしさを世界の人々に広げられるような、そんな仕事がしたい」それを今やっているんです。なんて恵まれた人生だろうか。なんて夢を持ち続けるというのは力があるんだろう。そう思っています。

199の国や地域が加盟しているといっても、多くのアフリカの国々、或いは東南アジアの国々、オセアニアでもオーストラリア、ニュージーランドを除いた国々。中米、南米、貧しい国々は多いです。柔道やりたくても柔道着がない、畳がない、教材がない、指導者がいない。なんとか微力でもそういう国々で柔道をやりたいと思う人たちを支援したい。そういう思いが一つ。

もう一つは、柔道というのは日本の心を伝えていくには非常に分かりやすく、適した日本古来のスポーツだと思います。だから柔道を通して日本の心を伝え、外国の人たちにもっともっと日本に興味、関心を持って欲しい。そういう思いでこの活動に参加しています。

相手に対する尊敬の念を

柔道着はいちおう着物です。着物に帯を付けています。欧米の女性は裸足になるということに対して、ちょっと抵抗があるようです。柔道着を着て帯をしめ、裸足で畳の上に立つ。そして日本式のお辞儀をする。日本式の礼をする。これだけでも日本の伝統文化の体験になるんです。

2月に外務省からの招聘で、アメリカのワシントンとロシアのサンクトペテルブルグに行きました。ワシントンで4回講演し、サンクトペテルブルグで2回講演。それとは別に、両方の都市で一日柔道着を着て指導してきました。

最近は少し年齢もいって、ワザも衰えてきたものですから、柔道着を着て見せることよりもこの口の方がですね、熊本弁とあごの方が達者になってきたんですけれども(笑)。私は日本でも外国でも伝える柔道の心というのは次のようなものだと思います。

柔道では何が一番大事か、戦う相手は敵じゃない、相手がいるから自分を磨き高めることができる。柔道で最も大切なことは戦う相手、稽古する相手に対して敬意、尊敬の気持ちを持つことである。そして、それを表しているのが日本式の礼法なんです。

実際私なんかもそうです。激しい競技をすると、やっているときは血が頭に上ってカーっときて、グァっとやることがあるんです。「やめー」と言われた瞬間に、熱くなったものがスーっと押さえられ、そして、どうもありがとうございましたと礼をする。その気持ちが大事なんです。それがなかったら、極端に言うと喧嘩も柔道も同じになってしまいます。

柔道の礼、これは日本ではみんな分かりますが、イスラムの国にいけば、アッラーの神以外には頭を下げないそうです。ですから、初心者はこの礼法にもの凄い抵抗を示します。もしかしたらアッラーの神以外に頭を下げてはいけないと思っているのかも知れません。

それからヨーロッパ、或いはアメリカ合衆国、こういった国々でも日本式のお辞儀と

いうのは、挨拶よりも相手に対してお詫びのように思えるのでしょうね。欧米の国々で初めて柔道をやる人は、柔道というのはけったいなスポーツや、何も悪いことをしていなくても最初に相手にお詫びしてから始めるようだ（笑）。終わったら終わったで、またお詫びしている。

ところが、やっていく内に段々これが分かるんです。欧米の人も、イスラムの人も、アラブの国の人たちも、みんなその心を理解してくれて、美しい礼ができるようになります。

柔らの道

それからもう一つ、柔道は『柔らの道』である。何で道なのか。これは日常生活、人生に活かすような道である。極端に言うと、人生に勝てなかったら、柔道であっても柔道ではない。もっと分かりやすく話しをしましょう。

柔道は激しいスポーツです。体力も付きます。精神的にも逞しくなる。電車やバスに乗って座っていて、年寄りの方がいればパッと立って「席をどうぞ」と言える。だって柔道を通して心身が逞しくなったら、それを活かしてはじめて柔道なんです。

重い物持っている人がいたら「持ちましょうか？」困っている人がおられたら、「何かお手伝いしましょうか？　何か私にできることはありませんか？」道場ではみんな先生にしっかり挨拶ができます。道場でできたことが、家とか学校でできなかったら、お父さんお母さんや他の人たちにできなかったら、それは本当の柔道ではない。

日本で今、神奈川で運動を展開しているのは、本当に柔道を通して精神的に逞しくなって、教室に帰ってから誰かがいじめられていたら、「おい、やめようよ。誰々さん、こっちへお出でよ」そのように活かして初めて柔道なんです。

世界でどんなに強かろうと、実際私より強かった人間はいませんからね、それでもまだ半分なんです。それをこれからの人生にどれだけ活かしていくか、柔道創設者が求めたのはその心なのです。柔道を一生懸命に頑張って強くなる、それを人生に活かすことと合わせて一つなんです。このことについては外国でも、子供たちを含め多くの人たちは非常に分かりやすいと理解を示して下さいます。

柔道の日本語は世界共通

もう一つ、柔道で使っている言葉は全て日本語です。「礼」「はじめ」「それまで」「引き分け」「一本」「反則負け」ワザの名称もそうです。

これは、ハッキリ言って外国の人は初めさっぱり分かりません。われわれにスペイン語とかポルトガル語とかロシア語とか中国語で何か言われるようなものです。でも「礼」と言われたら頭を下げにゃいかんな。「はじめ」と言われたら乱取りを始めていいんだな、とやっていく内にだんだん自分が使っている日本語の意味に多くの人が興味、関心をもつんです。柔道から日本語に関心を持ち日本文化に興味を持つ人が非常に多いんです。

ロシア大統領は親日家

ロシアのプーチン大統領も柔道家です。柔道6段です。何度もお会いしていますが、私にはこういう話しをされます。

「山下様、柔道って単なるスポーツではないですね、私にとって哲学です。柔道で学んだことが今活きています。柔道で使っている日本語は最初は全く分からなかった。やっている内に段々と柔道に使っている日本語の意味を知りたくなった。そして今日本に非常に興味を持っています。」

プーチン大統領は大の親日家であるということは、ロシアと交流している人はみんな知っています。それですぐ北方領土が返ってこないところが、非常に大きな問題ではあるんですけれども。

大統領はモスクワ郊外に別邸を持っています。そこのリビングルームには柔道創設者の嘉納治五郎師範の銅像が飾ってあります。娘さんが二人いて、二人とも柔道を昔やっていて、下の娘さんはサンクトペテルブルグ大学の東洋学科の日本語科に行っている。多分G8メンバーのファミリーで日本語をしゃべる家

族がいるというのはプーチン大統領のところだけだろうと思います。

これは特別な例ですけれども、私は貧しい国々を柔道を通して指導している。それが一つの方向。もう一つは、それを通して日本の心を柔道を通して伝えていきたい。そしてもっともっと世界の人たちに、日本人、日本の文化に興味関心を持ってもらいたい。そういう運動を展開しております。

それからもう一つ、私が学んだ柔道は、教育的価値の高い柔道でした。しかし、全日本の監督を務めている中で、私はだんだん日本の柔道界に疑問を持ち始めます。あまりにも柔道陣が、関係者が、勝つことばっかりこだわりを持っている。柔道のもつ心を、教育的価値、そういったものを見失っているふうに私には見えました。

なぜかと言いますと、例えば一つの例が、柔道の大会があるとき、国体とかインターハイとか中学の大会とか、柔道が使ったあとの会場は非常に汚い。みんなが決まりを破る。選手も指導者も、関係者も、そういう柔道界になっていってたんですね。

創設者嘉納治五郎師範の理想

近年は別ですけれども、昔はオリンピックの度に国民の期待を裏切って、マスコミから叩かれ、勝たにぁいかん、勝たにぁいかん、という事ばかりに気持ちが向いていたようです。創設者が何のために柔道を興したのか、柔道を通して実現しようとしたものは何なのか。そういうものがかなり見失われていたような気がします。

創設者が柔道を興し、創始した目的というのは明確に定められて、みんな知っているんです。柔道を通して心身を磨き高め、世の中を支える人材を育成していく。それこそが柔道の目的だとみんな知っている。でも柔道界はだんだんそれとは違う方向に行っていた。

私は全日本の監督をやりながら、全日本柔道連盟の役員の方々に訴えました。これでいいんですか、これは創設者が目指した柔道とは違うのではないですか。われわれはもう一回、創設者の理想の原点に帰る必要があるのではないですか、私はそういうことを訴え始めます。

私の大好きな言葉の一つに『伝統とは、形を継承することをいわず、伝統とは、その魂、その精神を継承することをいう』という言葉があります。果たしてわれわれは、創設者がつくった柔道を伝統を受け継いできたのだろうか。美しい技や勝ち負けだけを求めて、一番大事な精神を見失っているのではないか、そういう気持ちが強くありました。

最強の選手よりも
最高の選手づくりを

ちなみに八年間全日本の監督を務めさせて頂きました。監督の私を中心として、コーチ、スタッフが目指したものは最強の選手づくりではありません。われわれが目指したのは、最高の選手づくりでした。例えば昨日代表が決まったオリンピック選手で合宿やると、何度かこんな話しもしました。

「ここに集まっているのは、ただ日本で一番強いだけの選手ではないよな、ここに集まっているのは、日本の最高の選手だよな」

シドニーオリンピックが2000年に終わって、監督を退いて2001年日本の柔道界に新しい運動が起こります。『柔道ルネッサンス』もう一度柔道の創設者嘉納治五郎師範の理想の原点に帰って、柔道を通して人間教育を大事にしていこう、こういう運動です。この運動を立ち上げようということが、全日本柔道連盟・講道館で決まりました。

次に決まったのは、この責任者に山下になってもらおう。それから、もう一度理想の原点に帰って、教育する柔道を大事にしていこう。こういう運動を展開しています。

柔道ルネッサンス運動

少しずつ成果が上がってきています。これからいろんなスポーツと手を組んで、世界のいろんな国々の柔道と手を組んで、柔道を通して、スポーツを通して少しでも人づくりができる、そういう活動をして行きたいと思います。サッカーをはじめ他の競技団体も柔道のこういう取組みに注目してくれています。いろんな団体と手を組みながら、みんなでやれることをやっていきたいと思っています。

2006年から、神奈川県の体育協会の会長に私がなりました。今取り組んでいることの一つが、スポーツを通して弱い者いじめを防止しようという取組みです。スポーツの精神を日常生活に発揮していこうといった取組みです。

スポーツで一番大事なのは、フェアプレーの精神であり、スポーツマンシップです。しかし、通常これはコートの上、グラウンドの上での話しです。でも柔道や武道と同じようにこれを日常生活に活かすという視点に発想転換できないか、コートだけじゃなく、グラウンドだけじゃない、スポーツマンなら日常生活の中でもこのフェアープレーを大事にして行こうという考え方です。

このフェアープレーの精神に一番反する行為が、強い者が弱い者をいじめる、集団で一人をいじめる、いじめられた方に間違いがあったとしても、非を詫びているのに更に痛めつける、こういった行為は一番フェアプレーやスポーツマンシップの精神に反するのではないでしょうか。

いじめをなくす運動を全国に

神奈川県では中学校で約6割の子供たちがなんらかの運動部に所属しています。高校

で4割が所属しています。一人では立ち向かえなくとも、クラスの6割が、4割がスポーツをやっている、そういう子供たちがスポーツを通して教わったものを日常生活で発揮していけば、この非常に悲惨で大きな社会問題になっている弱い者いじめの問題に対してなんらかのくさびを打ち込むことができるのではないか、その辺からこの運動に取り組みます。

神奈川でやって神奈川で成果があっても、そんなの意味が無いと思っています。他の県や他の地域と手を組んで、いろんな県でいろんな所でスポーツマンが立ち上がり、その精神を日常生活に発揮した時に、この悲惨な問題が、これを取り巻く雰囲気が変わっていくのではないかな。

今は肉体的ないじめよりも、もっと陰湿な精神的ないじめの方が多いみたいです。なかなか形に表れないみたいです。でも、われわれの思いが変われば、そういった者に対しても一定のくさびを打ち込むことができると思っています。なんとかこれを成功させて、日本全国に広げていきたい。県の体育協会にはどこの県でもそうですけれども、全ての競技団体と、中体連と高体連と全ての市町村の体育協会が入っています。そこが手を組めば、決して不可能ではないと思います。

偉大な二人の恩師に

だいぶ私の持ち時間も無くなってきました。

いくつになっても前を見て、夢を持って、抱いて歩んでいきたいと思っていますけれども、私にとっては今人生の第三ステージではないかなと思っています。

大変欲張りな者ですから、第五か、第六ステージまで行きたいなと思っています。最初の人生は柔道選手としての人生でした。二番目の人生は、柔道指導者としての人生でした。そして、今三番目の人生に入っている。まだ四番目、五番目は私には見えません。見えませんといっても、政治家になる気持ちは全くございません（笑）。

政治家になることは、向かないから無いけれど、その次は考えているなと思われる方もあるかも知れませんが、まだ見えていません。でも人生の最後だけはハッキリ頭にイメージできています。

私はいつも、偉大な二人の方から見守られているんです。一人は私を孫のように可愛がってくれた東海大学の創設者松前重義先生。もう一人は柔道を創始した嘉納治五郎先生。私の人生最後には、これまでの務めが終わる時に二人に迎えに来てもらう。

嘉納先生が迎えに来て、「おう、君が山下か、よく『柔らの道』を極めたな！ご苦労さん」

松前重義先生が迎えにきてくれて、

「俺の見た目に狂いはなかった。よう頑張ってくれた。ありがとう」

二人に迎えられて、出来れば下に下がるのではなく上に上がりたい。上に上がる為にはやはりこれからの自分自身の生き方がかかっていると、そういうふうに思っています。

大島造船所の発展を

ずっといろんな人に支えられて来ましたので、これからは私もいろんな試練がくるのかも知れません。でも柔道を通して学んだことを活かしていかなかったら、柔道は人生の道ではない。そう思っています。私自身もこれからが本番だと思っています。

大島造船所も五年先まで予約がびっしりという話しですけれども、この業績から更に上向いて更に発展をされて、社会に貢献される、そういう会社としていつまでも発展されることを心から願っております。

以上をもちまして私の話を終わりますが、最後までご静聴下さいまして、どうもありがとうございました。

4月7日、大島アイランドホテルで開催されたご講演の内容を紹介させて頂きました。

本の紹介

「武士道とともに生きる」

山下泰裕／奥田　碩　共著〔角川書店〕

姿三四郎を題材に、失われつつある武士道精神と柔道に流れる独自の精神性、日本文化について幅広く語りあい、混迷の時代に生きる指針を示した書。

奥田氏（序）

①青春をともにしたのは「柔道」と「書物」。もっとも大きな影響を与えた書物の一つが富田常雄の「姿三四郎」その中には、日本人が営々と受け継いできた「美意識」や「美学」のようなものが端的に集約されている。

②山下氏の、柔道を通じて「武士道」のような日本人の精神を世界に広めたい、との言葉に感銘・共感。

③現在の日本では、「武士道」精神に代表されるような古くから伝わってきた日本人の美風が失われつつある。

④「武士道」を一過性のブームに終わらせることなく教育やスポーツをはじめ、日常生活のあらゆる場面で再評価していく努力が必要。

対談　日本人の心「姿三四郎」を世界に広めよう

奥田氏と山下氏は、2004年4月の日露賢人会議にて「姿三四郎」の話をした。

（プーチン大統領が山下氏と面識があり、大の柔道好きであったことから山下氏も会議メンバーに選出された。）

山下氏

このときの話をきっかけに「姿三四郎」を読んだ。↓姿三四郎のような純粋な心を持っていないことに気づいた。

奥田氏

柔道をしている人だけでなく、今の日本人が忘れてしまったものを知る上でも「姿三四郎」は有効。（例えば、武士道精神やサムライ魂）↓戦後60年、日本人は「お金」「モノ」へと突っ走った。↓その結果、大きなひずみが起こり、様々な問題を惹起。政治的な支障や多くの社会的問題も発生。

奥田氏

グローバル社会の今こそ武士道精神が肝腎だ

①「姿三四郎」に学ぶグローバリゼーション（地球規模化）の意味

人間には上下の差などない、民族的にも上下の差がないのだという平等公平な世界を作ることが大事。その世界の実現に向かって個々の人間がどれだけ成熟していけるか、努力できるのかということの典型が「姿三四郎」の成長物語に描写されている。

②「武士道」精神をグローバル社会に生かす

国際社会では、人種や文化の違い、年齢や性別の違いなど、様々な違いを持つ人間たちがどう付き合っていくかが問題。優越感や劣等感や、それに根ざした差別意識を持つのではなく、対等な相手として理解すること、また、弱者、劣者、敗者に対する思いやりを持つことが重要。具体的には、強がらない、弱い者を助ける、公平にことを行う、礼を重んじる、など、いずれも武士道精神の中にあるのではないか。

③日中問題と武士道

現在、日本と中国との間には戦争の傷跡として、靖国参拝の問題が横たわっているが、良い関係を築いていた時代もある。

いずれにしても、国際問題ということに対して、今の日本人は評論家になってしまっているように感じる。ビジネスにしても交渉やつきあいにしても真剣にやろうとしたら評論家ではいられない。当事者意識をもって相手の立場を理解するように努めることからはじめ、双方の利益になるためにはどうすればよいか考えていくことである。

山下氏

柔道の心は国際理解、世界平和に貢献しうる

①二人の師が世界に目を向けさせてくれた

・一人は、東海大学創設者、松前重義先生―生前、先生は「僕は君に試合で勝って欲しい。勿論それはある。でも、それだけじゃない。柔道を通じて世界の柔道人と親しくなって欲しい。それと、スポーツを通じて世界平和に貢献できる人間になって欲しい。」と何度も繰り返された。

・もう一人は、講道館柔道の創始者、嘉納治五郎先生。先生がどのような状況の中で柔術を学んだのか、そして、どんな気持ちで「柔道」を創始し、その柔道を通して何を目指していたのかということなど、その歴史や思いを東海大学体育学部武道学科で学んだ。

②柔道を国際化していく為に

日本で生まれた柔道を、多様性を持つ世界の中で発展させるため、世界の国々で、学校教育の中に柔道を導入してもらうということを手助けするDVDを作ろうというプロジェクトを実施、このことによって、勝ち負けだけじゃない柔道の素晴らしさや思いやる心、楽しさ、面白さを伝えたい、また、柔道を生んだ日本という国への関心や理解を深めてもらいたい。

奥田氏

現代人が失った死生観と倫理観を取り戻す

①「姿三四郎」との出会い

―昭和20年代

戦後、「姿三四郎」を通じて学んだ人生観や倫理観のようなものはどこかに吹っ飛んでしまった。そしてみんな揃って違う方向に走り出した。良いことか悪いことかは別にして、例えば、男が理想を追い求めるとか、女が家を守るというような部分が無くなってきている。

②「武士道」（新渡戸稲造著）「葉隠」（山本常朝著）が教えてくれるもの

武士道がブームになり、関連した書物が出版されている。今なぜ、出版されるのか。戦後60年の間に日本人が忘れてしまった大切な精神を、もう一度リバイブさせるためである。

「武士道」

「義」や「勇」「仁」「礼」「誠」、また「名誉」や「忠義」「切腹と敵討ち」「刀」「婦人の教育と地位」「武士道の将来」などが記載。特に「仁」の中で述べられている「惻隠の情」、即ち思いやりといたわりの心が現代の国際社会で見直されるべき大切な心ではないかと。

「葉　隠」

「武士道というのは死ぬことなり」という一説があるから滅私奉公、盲目忠誠という教えを記載されていると考えている人が多いが、実際には、出世するための方法や酒席の心得、組織に属する人間の心構えなど実際的な武士の処世術が記載されている。

山下氏

オリンピックでの大躍進から世界柔道の充実へ

①日本柔道界の奢りと危機

日本人選手や柔道関係者のなかには、日本が圧倒的に強かった時代には「柔道は日本で生まれた日本のものなんだ。だから日本人には理解できるが、外国人のお前らに何がわかると言うんだ」という奢りがあった。それが例えば、試合での微妙な判定やはっきりしない結果の時に、いつも日本側が負けてしまうという事態を引き起こしていた。これではいけないと、日本の柔道家たちが世界中の柔道家たちと一緒に、力を合わせて盛り上げていこう、発展していこうと考えを改めてくることにより日本柔道の強さを高めた。

②オリンピックで本当の柔道を示す

2004年夏のオリンピックで男女合わせても14個しかない金メダルのうち、8個を日本柔道が獲得、圧倒的勝利を収めた。日本はメダルの取りすぎだと思う人もいたようだが、その勝ち方が素晴らしかった、「柔道はどうあるべきか」ということを示してくれた、という人も数多くいた。（畳の上では敵として戦っても、試合が終われば同じ仲間、外国人が優勝しても喜びの声をかける）

奥田氏

武士道が教えてくれるリーダーの心得

①孤独なリーダーシップを支えるサムシング

実業の世界も柔道と同じで勝負の世界、勝つか負けるか、成功するか失敗するかは、数量計算のように簡単に答えが見つかるものではない。最後のところは、自分の心ひとつで、一種の賭けみたいな感じで決めてしまわないといけない局面となる。その決断の支えとなるのは、神とか仏とか、あるいはその人の人生観、死生観のようなものである。「姿三四郎」では「死ねばいいんだ」という表現となっている。

②社長になる意義

潜在意識というか、無意識的に「いつか社長になるぞ」と意識をしていた。だから、一つ上がったらすぐ次のことを考えるとか、絶えず前へ前へと向かっていこうと考えていけた。それがまた人間を大きくしてくれ、経験も積ませ、勉強させてくれた。運をつかむ準備をしておくことである。

③「なるようになる」とはどういうことか

「どうせなるようにしかならないんだったら、何もし

なくていいよ」ということではなく、とにかく精一杯、全力を尽くしてやる。もうこれ以上努力することはない、やれることは全てやったとなった先に、結果は自ずとついてくるということ。「人事を尽くして天命を待つ」も同じ意味のこと。

山下氏

「姿三四郎」と重ね合わせるわが柔道人生

①師匠の後ろ姿から教えられたこと

東海大学の松前先生と嘉納先生は偉大な師ですが、もう一人師と仰ぐのは佐藤先生です。佐藤先生から教えられたことは、一つに、柔道に関してはもとより、それ以外のことに関して勉強をするということ。二つに、誰の話であっても人の話をよく聞くということ。三つ目に、何かをやろうと思ったら、自分自身が頑張るのは当たり前、それ以上に、如何に周りの人の協力を得るか、巻き込むかということを考えていく、自分がやろうとしていることを如何に周囲の人に理解してもらい、サポートを得ることが出来るか、そこまで全て含めて総合力となる。

②無心になって戦う

身の回りをきちんと整え、たとえこの試合で自分の人生が終わっても悔いはないとの思いで試合に臨む。いろんな葛藤も廃して謙虚な気持ちで戦いに挑む。今までの試合で、本当の意味で心を無にして戦ったのは1984年のロサンゼルスオリンピックのエジプトのラシュワンとの決勝。

対談

「姿三四郎」に描かれた女性像とこれから女性に期待すること

当時の時代の典型、女性は家庭を守り、子供を育てる姿として描写。

山下氏

21世紀は、男性と女性がうまく協力して、それぞれの役割を果たしていくことが必要。

奥田氏

男性というのは、昔のサムライにしても、現代のサラリーマンにしても、女性に支えられ鼓舞され頑張っている。「女性が家を守る」「女が男を支える」事も立派な生き方、自分が自由に選択したものであれば、他の生き方にも劣らない。勿論、女性が社会に出て活躍するのも立派。大切なのは助け合う、支え合う心。

奥田氏

日本人よ新たな旗を掲げよ

①旗のもとに団結する心

1944年太平洋戦争終盤にインパール攻略作戦があった。この戦いについては多くの小説等に記載されているが、その中の一節に「人間の集団には旗が要るんだ。どこの集団にも旗というものがあって、その旗のもとにみんな集まることによって、目的を達成したり、ことを行ったりすることができる。そのぐらい、旗は大事なものだ。」旗は、日本人にとって大事なもの。それは象徴としての旗印という意味だけでなく国旗そのものです。何か特別な思想的なことでなく、みんなで手を取り合って一致団結しようという、シンプルな、いい意味での愛国心が必要。

②旗は集団の行方を決める

国だけでなく、企業にとっても旗の存在、意味は非常に大きい。その旗を具体的に言うなら、どんなリーダーがトップに立っているかということであり、精神的に言えば、どのような企業理念、目標を持っているかということをあらわす。

山下氏

「柔道ルネッサンス」で人生の勝利者を目指す

①「柔道ルネッサンス」が目指すもの

柔道だけでなくスポーツの世界では、勝つか負けるかが重要であるが、それに加えて人間づくり、人間教育の場としていく必要がある。

②過去は振り返らず、常に前を向いて

まだまだこれではダメだと、常に前向きに理想を追求してきた。過去のことには聞かれてもあまり応えられない。これから先のことだったら2時間でも3時間でも話せるし、そのほうが好き。

③夢を見続けられる幸せ

まだまだやりたいこと、やるべきことがある。やるべきことを実現していくことで、多くの人に喜びを与えることを目指していきたい。

奥田氏

子供たちに、日本の心を伝える教育を

①子供の問題と学校教育

最近いじめとか、子供が子供を殺す、親を殺すというような問題が起こっている。この先、子供たちへの、きちんとした動機づけや人間教育が必要。グローバルな社会に生きる子供たちにこそ、日本の歴史や伝統や文化を知ってもらい、日本人の誇りを持って生きて欲しい。

②熱中できることを見つけよう

勉強だけでなく、何かに熱中出来る子供を育てよう。何かに熱中してきた人間にはその人生経験が身についているし、潜在意識の中にも自分の体験として蓄積される。

以上